

## 論文審査の結果の要旨

論文題名

現代日本語の感情形容詞の研究

論文審査の要旨

村上佳恵氏が提出した学位請求論文は、現代日本語の感情形容詞の文法的・意味的性格を実証的に調査・記述し、その機能と特徴について分析・考察したものである。

日本語の形容詞は世界の諸言語の中でも珍しい性質を持っている。一つは、形容詞と形容動詞という、形態論的な活用の異なる2種類の形容詞を持つという点であり、もう一つは、意味的に属性を表すタイプと感情を表すタイプという2種類の形容詞を持つという点である。本研究は、この後者の点から分類される感情形容詞を取り上げたものである。

これまで現代日本語の文法研究は「動詞」を中心に行なわれてきたが、近年は類型論的な観点から、日本語の「形容詞」に対する関心が高まっている。日本語の感情形容詞については、その特殊な文法的性格に関する研究の蓄積は豊富ではあるが、しかし属性形容詞と感情形容詞の分類基準が明確でないものも多く、また分析対象が単文末の述語用法の場合に偏っていた。本研究はこうした問題意識から、感情形容詞の定義・範囲、そして用法・機能について全般的に検討し、その全体像を描き出そうと試みている。

本審査会は、この学位請求論文に対して、詳細な質疑応答による口頭試問を実施した。

本論文は全9章からなる。まず序章では、研究目的、本論文の構成、術語の定義、および本研究が使用したコーパス『現代日本語書き言葉均衡コーパス (Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese)』(国立国語研究所)の概要がまとめられ、続く第1章では感情形容詞に関する先行研究が整理されている。第2章は本研究の柱の一つであるが、形容詞の中から感情形容詞を選定するテストフレームを考案し、実際に基本形容詞642語を4種に分類する。そして第3章では、それら4種の形容詞の使用実態を、コーパスに基づいて分析した。続く3つの章では、感情形容詞の機能別の分析が続く。第4章では終止用法、第5章では連体用法、第6章では連用用法の場合を詳細に記述する。そして第7章では日本語教育における感情形容詞の文型指導について具体的な提案を行ない、終章において、本論文の結論とともに、残された課題が述べられている。以下、各章の概要をまとめる。

序章では、本研究のきっかけが、村上氏が日本語教師として日本語学校で教える中で出会った「みんなに会って、うれしいです」という日本語学習者の誤用であったこと、そして、この博士論文の目的が、この文を、「みんなに会って、うれしい」ではなく、「みんなに会えて、うれしい」と、従属節に可能形を使わなければならない理由を明らかにすることであることが述べられている。

第1章では、感情形容詞の研究が時枝誠記(1941)に始まり、「対象語」としての格助詞「が」の問題、「属性と情意の総合的な表現」という意味論的な問題、感情形容詞の主語が原則として一人称に限定される「人称制限」という統語的な問題、この3点をめぐって議論がなされてきたという研究史をまとめるとともに、従来、扱われてこなかった、感情形容詞が複文の述語となる終止用法、連体修飾用法、連用修飾用法を取り上げることが述べられている。

第2章では、考察対象となる「感情形容詞」の範囲を定めるため、3種類のテストフレームによる独自の分類方法を提示し、形容詞をA群からD群の4種に分け、実際に基本形容詞642語を分類した。まずA群は典型的な感情形容詞であり、経験者の状態を志向するもの(例: 悲しい、残念な: 39語)、B群は経験者の状態だけでなく対象の状態を述べることをも志向するもの(例: 寒い、快適な: 49語)、そしてこの2群を感情形容詞と画定した。C群・D群は属性形容詞であるが、C群は、ある限定された時間における動きの行なわれ方を副詞句として表す際には感情形容詞のように振る舞うもの(例: うるさい、気の毒な、24語)、そして最後のD群は典型的な属性形容詞(例: 明るい、静かな: 530語)である。形容詞に感情・属性の2種があり、両者の間に中間的なものが存在することは、先行研究でも指摘があるが、形容詞の明確な分類方法を独自に考案し、それに基づき一定量の形容詞を全て分類した功績は非常に高く評価されるものであり、この4分類が今後の形容詞研究において与える影響は非常に大きい。

第3章では、感情形容詞と属性形容詞の使用実態を調査するために、BCCWJから異なり語数347・延べ語数7661の形容詞の例文を抽出し、分析した。その結果、全体としては約半数が述部で用いられること、検定の結果、感情形容詞A群は「淋しく見ていた」のように修飾部で用いられることが有意に少なく、属性形容詞D群は、「固く誓った」のように使われることが有意に多いこと、そして属性形容詞であるC群は、A群と同様に修飾部の用法が少なく、C群が属性形容詞でありながら、感情形容詞の性質も持つことが考察されているなど、第2章で行なった4分類の妥当性が量的に裏付けられている。

第4章では「試験に合格して、うれしい」のように、前件が動詞のテ形、後件述語が感情形容詞となる文について考察を行った。このような文は上述の通り、本研究のきっかけとなったものであり、次の2つの主張がなされている。第一は、「Vテ、感情形容詞」には、前件が感情の対象である[対象事態]タイプ(例: 着物を着られて、うれしいです)と、[対象認識]タイプ(例: 知らせを聞いて、残念です)の2種があること、第二は、[対象事態]の前件は自己制御性のない事態でなければならず、そのため前件主体が一人称の場合、可能形が必要とされること(例: みんなに会えて、うれしいです)が明らかになった。更にそれぞれのタイプについて、前件テ形に求められる形態的・統語的な制約が丁寧に記述されている。この2タイプの指摘、自己制御性が関与するとの分析、また[対象認識]タイプという、感情の対象を認識する段階を言語として顕在化したタイプを抽出した意義、いずれも特筆すべきものである。

第5章では、連体用法を考察する。感情形容詞と属性形容詞の双方についてBCCWJによる調査を行ない、感情形容詞と被修飾名詞の関係には次の7タイプがあることを指摘した。そのうち、[対象](例: うれしいプレゼント)、[経験者](例: 成人病が心配な人)、[内容](例: つらい気持ち)の3者は既に先行研究に指摘があるが、[表出物](例: つらい声)、[とき](例: つらい日曜日)、[相対補充](例: 彼女に会うのがつらい理由)というタイプがあることを新

たに指摘し、形式名詞を修飾する〔その他〕(例：心配なはず)を加えた7種を立てた。その結果、西尾寅弥(1972)による、「感情形容詞」は連体修飾位置においては属性の表現となることの指摘は、〔対象〕タイプについては適切だが、〔経験者〕〔内容〕〔表出物〕ではあたらないことが示され、感情・属性両形容詞の分類と機能に関する従来にない指摘がなされている。

第6章では、感情形容詞の連用用法に、動作主認識を表すタイプ(例：知らせを悲しく聞いた)と、そうでないタイプ(例：鐘が悲しく響く)があること、前者については、認識を表す動詞が多く出現すること、感情形容詞A群は、主節述語が非過去形では用いられないことが、後者は感情を引き起こすモノの側から描かれた文となり、属性形容詞文に近づくこと、「愉快に描く・悲しく演じる・切なく踊る」のように生産動詞の例が見られることなどが記述されている。そして、従来、感情形容詞の連用用法は因果関係を表すとされてきたが、本研究では因果関係がない場合もあること、全ての例に共通するのは同時性であることが指摘されている。

第7章では、本研究の出発点である「みんなと会って、うれしいです」という日本語学習者の誤用をなくすために、この文型を初級の日本語教育でどのように扱うべきかを考察している。まず、現行の初級日本語教科書16種を分析し、「Vテ、感情」という文型が、「原因・理由のテ」(例：重くて、持てません)の一種として扱われていること、「原因・理由のテ」は、「後件」に自己制御性がないことによって動作継起ではなく因果関係を表すと説明がなされることが多いことを踏まえ、この文型は、「みんなに会えて、うれしいです」のような〔対象事態〕というタイプにおいては、「前件」が自己制御性のない事態でなければならないという知識が産出においては重要であり、原因・理由のテから「Vテ、感情」を取り出し、〔対象事態〕と〔対象認識〕を別の文型として扱うべきであるということが主張されている。

最後の終章においては、これまでのまとめとして、感情形容詞が、終止・連体・連用の3用法において、どのように感情を表し、またどのような条件のもとでは属性を表すのかが整理されるとともに、残された課題が提示されている。

以上のように本研究は、現代日本語の感情形容詞の全体像について、新たな枠組みを提示し、その意味・用法・機能を、コーパスから抽出した多量の用例に基づいて実証的・計量的に分析・記述した労作であると高く評価できる。しかし、研究にはまだ多くの課題が残る。

感情形容詞の分類や各用法における分析は、総体としては妥当性の高いものと認められるが、個々の形容詞については、更に分析が必要であること、両種の形容詞に対して、従来の研究にはない明確な区分を行ったことは特筆すべきであるが、感情形容詞から属性形容詞へ、あるいはその逆へと移行・派生する現象についてもきめ細かい考察が求められること、日本語の形容詞の2分類が、一般言語学における Stage-level と Individual-level の2分類や、日本語学における品定め文と物語り文／判断文と現象文／属性叙述と事象叙述という2分類とどのように関わるのか、あるいは時間的限定性 temporal localization/temporal stability の問題とどのように異なるのか、ということについて検討する必要がある。また3用法の記述に関しては、述語用法はテ形節に続く場合に限られていたが、それ以外の複文の主節末や単文末の場合についても本研究の枠組みのもとでの考察をぜひ行なって欲しいこと、連用用法の分析については、感情と属性の関連をより明確にする必要があること、などが指摘された。

こうした課題は残るものの、これらはすべて今後の新たな研究に発展し、本研究で提示され

た枠組みのもとで確実な成果をあげ得ることが十分に期待される。本研究で示された新たな知見と研究成果は、日本語学・言語学・日本語教育のいずれにも資するものであることは明らかであり、感情形容詞の諸相を詳細に分析し、その全体像を記述的にまとめ上げた本論文の意義は極めて大きく、それについては試験担当者一同が認めるところであり、本論文が博士（日本語日本文学）にふさわしいことを全員一致で承認した。

以 上

論文審査委員：主査 前 田 直 子 教授  
                            鷺 尾 龍 一 教授  
                            木 村 義 之 特別非常勤講師  
  (慶應義塾大学 教授)